

《滴 2》 1981+87年トタン板腐蝕 当館蔵

関連プログラム

学芸員によるギャラリー・トーク

日時：4月12日(土)、5月24日(土)
各日 午後2時～
*申込不要、無料
(ただし「一原有徳 1910-2010」展の観覧券が必要です)

同時開催

神奈川県立近代美術館 鎌倉別館
tel. 0467-22-7718
「新収蔵作品展 併陳:小泉淳作デッサン展」
4月5日(土)ー6月22日(日)

神奈川県立近代美術館 葉山
tel. 046-875-2800
「立ちのぼる生命 宮崎進展」
4月5日(土)ー6月29日(日)



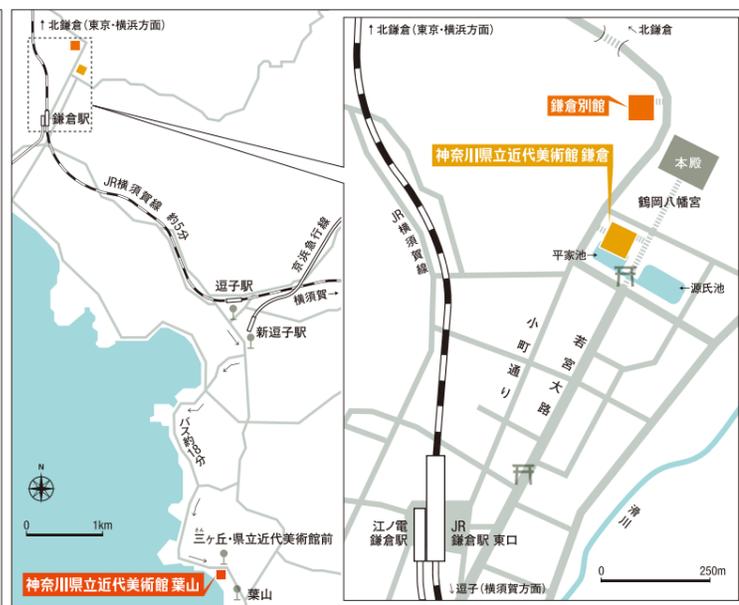
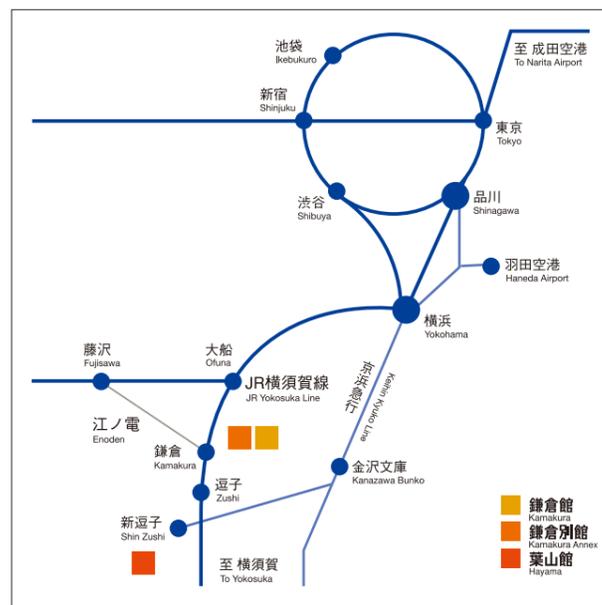
《銅のメモ》より 1974年 モノタイプ銅版 当館蔵

優待料金のご案内

「一原有徳 1910-2010 版—無限の可能性」有料観覧券(65歳以上券、高校生券を除く)の半券をご提示いただくと、同展会期中に限り、葉山館で開催中の展覧会を優待料金でご覧いただけます。

鎌倉館への交通案内

- 公共交通機関利用の場合：JR横須賀線・江ノ島電鉄「鎌倉」駅下車、徒歩10分
- 横浜横須賀道路利用の場合：朝比奈インターチェンジから鎌倉霊園を經由して鶴岡八幡宮前へ約4km



一原有徳 1910-2010

版—無限の可能性

ICHIHARA Arinori 1910-2010 : A Retrospective

2014年4月5日(土)ー6月8日(日)
神奈川県立近代美術館 鎌倉
The Museum of Modern Art, Kamakura

休館日：月曜日(5月5日は開館) 開館時間：午前9時30分ー午後5時(入館は午後4時30分まで)
観覧料：一般700円(600円)、20歳未満と学生550円(450円)、65歳以上350円、高校生100円
主 催：神奈川県立近代美術館

* ()内は20名以上の団体料金です。 *中学生以下、及び障害者手帳をお持ちの方は無料です。その他の割引につきましてはお問い合わせください。
●ファミリー・コミュニケーションの日：毎月第一日曜日(今回は4月6日、5月4日、6月1日)は、18歳未満のお子様連れのご家族は、優待料金(65歳以上の方を除く)でご覧いただけます。
●無料開館日「国際博物館の日」：5月18日(日)は、神奈川県立近代美術館で開催中の3つの展覧会を無料でご覧いただけます。

神奈川県立近代美術館 鎌倉
The Museum of Modern Art, Kamakura

〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-1-53 tel.0467-22-5000
2-1-53 Yukinoshita, Kamakura, Kanagawa 248-0005
<http://www.moma.pref.kanagawa.jp>



The Museum of
Modern Art,
Kamakura &
Hayama
神奈川県立近代美術館

一原有徳 1910-2010

版——無限の可能性

ICHIHARA Arinori 1910-2010 : A Retrospective

このたび神奈川県立近代美術館 鎌倉では「一原有徳 1910-2010 版——無限の可能性」を開催いたします。

一原有徳(1910-2010)は、徳島県那賀川町に生まれ、3歳の時に家族とともに北海道に渡り、小樽を拠点に旺盛な版画制作を行いました。1950年代後半、最初に、石版石を用いたモノタイプに着手。以来、一貫してモノタイプと実験的な金属凹版による表現を探究し、国内外で高い評価を得ています。銅、鉄、亜鉛、アルミニウム、ステンレス、あるいは廃車のボディといった金属の表面を、叩き、削り、腐蝕させて版とし、既存の常識を打ち破り、版画の可能性を拡張し続けました。本展では、抽象表現でありながら、鑑賞者の想像力を刺激してやまない、一原有徳の「版の世界」を一望します。



《蝕 2C》 1960年 木板に寒冷紗貼付け、錫箔切抜き



《251》 1965+87年 腐蝕銅版



《銅のメモより》 1975年 モノタイプ銅版

異次元の記憶の結像

一原は、軽妙洒落な発想と縦横無尽の手法により、独自の実験的な版画芸術を展開しました。それまでの多くの版画家が、複製技術としての版画に着目してきたのに対して、確かな手応えをもって、創造の力学として、「版」という構造を存分に活用し、版画の自由を大いに謳歌しました。一原にとって「版」は、ひとつの技法ということを超えて、卑近な記憶をむしろ排除してゆき、純然たる抽象表現を生み出していく契機となりました。一個の私的な時間の流れの中では捉えがたい、偶然的で未知の、異次元の記憶を、一原は「版」により画面へと転写したといえるでしょう。未生の異物をつぎつぎと招来するために、その「版」をあらゆる次元へと開いてきたのです。

壁のしみのように見えたり、風景のように見えたり、生き物のように見えたり、一原の版画からは多様なイメージが立ちあがってきます。あるいはそこから、閑けさの中に、雨や風の音や、生物の細胞がうごめくような音が聞こえてくるかもしれません。一原の版画は、そうした微かなものたちの波動を豊かにかかえこむ稀有な詩想といえるでしょう。九糸郎という俳号で俳句も詠んだ一原の句集『メビウスの丘』(2001年)には、次のような句があります。

メビウスをめぐりどおしのかたつむり



《RS 19-b》 1989年 腐蝕銅版



《SY(e) 8-A》 1989年 腐蝕銅版



《RU 10》 1988年 腐蝕銅版



《THM》 1982+87年 腐蝕銅版



《ZY 11》 1991年 腐蝕銅版



《KG 6》 1980年 腐蝕銅版



《SIM》 1975年 腐蝕銅版



《銅のメモより》 1976年 モノタイプ銅版

1910年に生まれ2010年に100歳で他界した一原は、17歳で通信省小樽貯金局に事務員として入局し、43年間勤務しました。1928年頃から俳句の創作を開始。1958年に銅版プレス機を入手し、その頃より本格的な版画制作を始めています。若い頃は北海道に数多く残っていた処女峰をことごとく踏破する登山家としても知られ、句作のみならず、兵隊体験などを小説にする多才な人でもありました。1970年、小樽貯金局を退職。以後、創作活動に専念。その年、小説『乙部岳』が太宰治賞候補にもなっています。

本展では、当館の一原作品のコレクションから厳選した、60年代から90年代の版画作品を展覧します。鏡にも似た「版」という構造から出現したそれらの作品群には、儼いものへの憧憬も、得体の知れぬものへの不安も、渾然一体となって画面にたゆたっています。そしてたゆたいながら浮沈するそのモノクロームの色や形は、終わることのないメビウスの輪のような、収束不能の情動として、宇宙をも感じさせる無限の可能性をわたしたちに呈示し続けています。